

シノドスへの歩み みことばと共に 四旬節第二主日 C 年

小西広志

2022年3月13日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年3月13日、四旬節第二主日となっています。今日の三つの朗読箇所をシノドス的な観点から読んで味わってまいりましょう。

煙を吐く炉と燃える松明

今日の第一朗読は『創世記』15章からです。17節の「煙の吐く炉と燃える松明」とは神さまの臨在の表現です。炉と松明が「二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた」（17節）のです。契約を結ぶ者同士が「裂かれた動物の間を通り過ぎる」ことによって結んだ契約をしっかりとしたものとするという慣習が当時あったそうです。もともと約束、あるいは契約には「ことば」と「しるし」が伴います。例えば、子どもたちがお互いに約束しあうときに「指切りげんまん。嘘ついたら針千本飲ます。指切った」としますね、本当に針千本飲まされたら大変なことです。しかし、お互いに交わす約束が真剣であることを表すためにこのように言うのです。

「裂かれた動物の間を通り過ぎる」という行為も、もし、今交わした約束を破ったら、このように身を裂かれても致し方ないですよという固い約束を表しているのでしょうか。『エレミヤ書』の34章18節には契約について次のように記されています。

「わたしの契約を破り、わたしの前で自ら結んだ契約の言葉を履行しない者を、彼らが 契約に際して真っ二つに切り裂き、その間を通ったあの子牛のようにする」

ところで、今日の朗読箇所にある神さまとアブラハムが交わした約束では、「二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた」のは神さまだけでした。「アブラハムは深い眠りに襲われ」ていました。契約を守ることを誓ったのは神さまの側だけだったのです。この約束は、神さまからの一方的な契約です。アブラハムが果たさなければならぬ義務については一切記されていません。

今日の第一朗読の最後の箇所、15章18節には「あなたの子孫にこの土地を与える」とあります。岩波書店から出版されている聖書、岩波訳を見ると、「与えよう」となっています。この「与える」と訳された単語は原文では「わたしは与えた」という完了形が使われています。将来、必ず実現することをヘブライ語では完了形を用いるのだそうです。ですから、今日の朗読にある神さまの側からの契約は、神さまの熱心さによって必ず

成し遂げられるものなのです。そのことを信じて生きたモデルこそ信仰の父アブラハムでした。

冠

第二朗読は使徒パウロの『フィリピの信徒への手紙』です。最後にある「冠」ということばをここに留めましょう。ギリシア語ではステファノスといます。輪とか王冠の意味がありますが、次第に賞とか、報酬の意味へと展開していきました。それで「栄冠」とも訳されます。また、誰かにとっての誇りや誉れとなるものを表します。パウロはテサロニケの信徒のことも「冠」と呼んでいます（一テサ 2 章 19 節）。何げないことばですが、パウロのテサロニケの信徒、フィリピの信徒への敬意が表されている表現です。

エルサレムで遂げようとしておられる最期について

四旬節第二主日は毎年、イエスさまのご変容の場面が読まれます。今日の福音朗読は『ルカによる福音書』の箇所から採られています。31 節の「エルサレムで遂げようとしておられる最期について」を少し考えてみましょう。「最期」と訳された単語はギリシア語でエクソドスです。これは「旅立ち、出発」の意味があります。七十人訳聖書（旧約聖書のギリシア語訳）ではエクソドスは出エジプトの出来事を指しています。しかし、エクソドスに「死」の意味を当てはめることもありました（知 3 章 2 節、7 章 6 節参照）。ですから、ここでのエクソドスはイエスさまの死を意味するでしょう。

しかし、「栄光」（ドクサ）という表現が前後に見られますので、イエスさまが十字架の死を過ぎ越して、復活なさり、天に向かう「旅立ち」の意味も含まれると思います。イエスさまは「わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まなければならない」（ルカ 13 章 33 節）とおっしゃいます。イエスさまの十字架でのエクソドスは「死」とであると同時に、栄光への旅立ちでもあるのです。

さらに 32 節で「ペトロと仲間は、ひどく眠かった」とあります。ここは、直訳すると「眠りで重くなっていた」となります。田川健三氏によれば「眠気をもよおしていた」の意味ではなく「深く眠り込んでいた」の意味だそうです。お弟子さんたちが眠り込んでいたにせよ、激しい睡魔に襲われていたにせよ、お弟子さんたちのこのころの目は閉じてしまい、イエスさまの「栄光」の姿に対しても正しく理解できませんでした。モーセとエリア「二人は栄光に包まれて現れ」たとあります（31 節）。そしてイエスさまは「栄光に輝く」姿でした（32 節）。この『ルカによる福音書』だけに見られる表現は、おそらくイエスさまの復活、あるいは再臨と結びつくのでしょうか（21 章 27 節、24 章 26 節参照）。イエスさまのエクソドス「旅立ち、出発」は十字架での受難の死で終わるのではなく、復活へと至るのです。

まとめ

最後に、まとめとして、二つのことばに注目したいです。まず、第二朗読にある小さなことば、「冠」です。パウロは司牧者、宣教者なんですね。そして、教会の信徒を愛し、ほめている。このことが「冠」という表現から見とれます。わたしは司祭として、自分が担当する小教区共同体の方々を「わたしの喜び、わたしの冠」と言えるでしょうか？それほど、信徒の方々と密接に関わっているのでしょうか？そんなことを考えさせられることばです。

もう一つ注目したいのは、福音朗読の 33 節にある「仮小屋を三つ建てましょう」です。ここでは幕屋を意味するスケネーが使われています。ペトロはイエスさま、モーセとエリアの三人を地上に引き留めようと考えたのでしょう。そうしますと 31 節で三人が語りあっていた「エクソドス」、すなわち「旅立ち、出発」についてはペトロは聞いていなかったこととなります。あるいは聞いても理解していなかったこととなります。

しかし、イエスさまは「選ばれた者」(35 節) ですから、地上からの栄光を得るのではなく、神さまの想いを忠実に果たして栄光を得るのです。神さまはイエスさまに華々しい栄光は与えず、みじめな十字架の栄光を担わせるのです。そのためにイエスさまはエルサレムへと向かいます。「これに聞け」(35 節) という神さまの指示は、仮小屋を建てて立ち止まるのではなく、イエスさまの後に従ってエルサレムに向かって歩みなさい、そしてイエスさまのことばに従いなさいという招きのことばだったのです。

教会は歩みます。歩む教会です。地上のどんな栄誉も栄光も教会には必要ありません。教会に与えられる栄光は神さまからいただくものです。それでも、罪人の集まりである教会は地上的な、この世的な栄誉を求めてしまします。

教会はどこに向かって歩むのでしょうか。イエスさまがエルサレムに向かって、カルワリオの十字架に向かって歩んだのと同じように、教会はイエスさまの十字架を目指して、イエスさまの十字架に向かって歩むのです。こうして、教会そのものが、罪人の集まりである教会が神さまの栄光を表すのです。

今、2022 年 3 月 13 日のイエスさまの十字架は、例えばウクライナで戦火から逃げまどう人々と共にあります。だからこそ、教会は避難する方々と足並みをそろえて、一緒に歩むのです。

少し、長いお話になりました。

それでは、また来週。